

交流会活動記録

2月15日(土)13:30-ハイブリット形式で30名(修了生等12名、学部生2名、教員16名)の参加のもと交流会を開催しました。

最初に横山教授より「保健学研究科の変化と修了生へのメッセージ」と題してご講演いただきました。医学系研究科保健学専攻から保健学研究科へ移行した経緯、3領域を有し、定員も多いなど、保健学研究科の強みや、“リーダー養成”という保健学研究科の使命についてお話しいただき、保健学研究科で学べてよかったと思うと同時に、次世代へ継承していけるよう教育・研究に励む必要があると再認識しました。

次に3名の修了生から、現在の活動状況が報告されました。看護の佐藤文美氏は専門看護師として周囲の人の研究へのハードルが下がるよう、相手に寄り添った研究支援を行っていることを報告されました。検査の雨宮健司氏は所属する病院でゲノム解析センターの立ち上げや、がんゲノム医療(がんになりやすい遺伝子変異を持っているか、抗がん剤が効きやすいか、などを調べる)への取り組み、臨床の業務の中で効率的に研究を継続するための心がけや具体的なツールを紹介してくださいました。リハの近藤健氏は、博士課程で実施された看護師と作業療法士によるADLカンファレンスの効果や3Dプリンターを用いた自助具の作成やそれに関する研究、教育場面での活用などをご紹介いただきました。

講演後に参加者全員で自己紹介を行った後、部屋を別れて、領域別の交流会を実施しました。看護では大学院進学について、仕事と大学院生活の両立、研究スケジュール、修了後の研究への取り組みについて等の質問があり、修了生の経験を共有しました。検査では本学の大学院修了生の方から、職場で研究を進めるための体制、周囲との連携に関する質問があり、雨宮氏からご回答をいただきました。リハでは今後大学院の進学を検討している方、大学教員として勤務しながら大学院へ進学した方から、仕事と研究の両立、修士課程における研究の進め方、学生間で能力差がある際の効果的な授業の実施方法などの質問があり、近藤氏や先輩修了生が質問に回答しました。

参加者からは「このような活動があることを初めて知った」、「さらに多くの方に聞いてもらいたい」、「多職種への理解が深まるのが転じて自分の業務に何かしら活かせるのではないかな」などの感想があり、今後も交流を広げていきたいと感じました。

(修了生ネットワーク幹事一同)

